

永続革命論の歴史に寄せての覚書

ーレーニン、トロツキー、グラムシー

八木沢二郎

ジャン・ジャック・ルソーの一般意思という無限に永続革命に収斂する論を前史として、それが明確な形でかたられるのは、云うまでもなく、1848年のフランスとドイツの(流産した)革命に際したマルクスによつてだった。

「関の声は、永続革命と！」(共産主義者同盟中央委員会の挨拶)時を経て永続革命論は、バルブスとトロツキーによつて、1905年のロシア革命の時復活した。05年の第一次ロシア革命は、現代革命の幕開けだった。ベルンシュタインとカウツキーを代表選手とした修正主義論争は、実践的にはこのロシア革命への態度をめぐる争いでもあった。当事者たるレーニン、トロツキーはもとより、ローザ・革命的だった時の(レーニン)へロシアびいきだった頃の(ローザ)カウツキーも「ロシア革命は、19世紀における一

連のブルジョア革命のなかでの最終行動ではなく、むしろ、新たな系列をつくるべき未来のプロレタリア革命の先触れ」(ローザ、「選集2」p71)であるという認識で一致していた。

当時の第二インターの右派は、社会主義革命は、進んだ資本主義国で、プロレタリアートの(多数を獲得)してなされるという固定観念に縛られていた。しかし、事実は、「資本論に反対する革命」(グラムシ)として進化した。このグラムシの表現自体が、当時の一般的考えー先進資本主義での二大階級への分化と階級闘争の進行によつて、まず先進国で革命は、生じるーを端的に表している。

トロツキーは、遅れた国での革命を(複合的発展の法則)から説明した。「ロシア革命史」、「永続革命論etc」即ち、後進資本主義では、本来ブルジョアジーがなすべき課

題—政治的民主主義、と農民解放を二大課題とする—が、ブルジョアジーはすでに足下のプロレタリアートを恐れて、封建的勢力と妥協し去勢されている、従つてその課題は、いまやプロレタリアによって荷われるが、彼らは当然そのような民主主義的課題を解決するだけでなく、進んで権力を獲り社会主義革命へと突き進むと。

このような論理は、すでに、初期のマルクスに見る事が出来る。「ハーゲル法哲学批判序説」で、ドイツでは、ブルジョアジーが、フランス革命を教訓として、プロレタリア・人民を恐れユンカー、絶対主義勢力と妥協し去勢されている。従つて、フランスでは、ブルジョアジーによって荷われた政治的解放は、ドイツでは、新たな担い手が発見されねばならない。それは、プロレタリアであるが、その本性からして、政治的解放にとどまらず同時に（人間的解放）であると。

II 永続革命論と「二つの戦術」

このような永続革命の論理は、わかりやすい論理である。そして大局的に見る時、ロシア革命以降の一連の成立した革命も、中国やキューバ、ベトナム のように、そこでの植民地と封建的制度からの解放は、プロレタリアと農民によってなされ、従つて民主主義革命にとどまらず、社会

領と最大限綱領の意味を失わせる—に何の意味があるのか？！ 革命は、常に、人民にもたらされている惨禍から出発してそれを現実的に解決する時にだけ成功する。

トロツキーの複合的發展の法則から説く永続革命論のもう一つの問題は、その自然成長性である。先にローザを引用したように1905年のロシア革命以降、つまり帝国主義段階に入つて革命の（現実性）（ルカチチ）の時代になった。だが、それは、（傾向性）あるいは、蓋然性であつて、なにか法則的なものではない。資本主義は、決して自動崩壊するものではない。ブルジョアジーは、危機に対応して上からの改革を進める、また、その中で労働者の内部にこれに対応する改良主義的翼が生じる。—先進国では、選挙権の拡大、労働組合の容認、社会保障制度の拡大等、遅れた国では、農業の上からの資本主義的改革、レーニンがいう「二つの道」のプロシヤ的道であり政体としてのエンゲルスのいうボナパルチズムの推転である。こうしてブルジョアジーの上からの改革とそれを左から支える改良主義的翼（様々な）と革命的翼の闘争がとりわけ危機の時代には激化する。従つて、永続革命の（蓋然性）は、この激しい闘争の中で革命的翼が、プロレタリア・人民の階級意識を高め領導した時初めて現実性に転化する。これこそが、トロツキーやローザが軽視したものである。（トロツキスト）は、彼の永続革命論は、正しいが、党組織論がなかったと

主義革命である—いづれも永続革命の論理でなされたと云えよう。だが、トロツキー流の永続革命は、正当なのだろうか？ レーニンは（革命的民主独裁）をいい、毛沢東は（人民民主革命）（新民主主義）を主張した。革命の性格は、二つの要素によって決定される。一つは、その革命がどの階級によって領導され、成立した革命権力をどの階級が掌握しているかであり、二つは、その革命の課題（内容）である。—それは、当該国家の資本主義の發展段階と（打倒さるべき）権力の性格による。いわゆる（トロツキスト）の前者のみから（誰がヘゲモニーを握っているか）革命の性格を規定するのは誤りである。トロツキーは、1905年ロシア革命で、「二つたん権力が掌握されれば、最小限綱領と最大限綱領とのちがいは原理的意味も直接の実践的な意味も失う」（結果と展望）と述べるが、原理的意味もとりわけ実践的意味は、重大である。例えば、キューバ革命でのカストローゲバラは、直接的に社会主義革命を志向したわけではない。アメリカ帝国主義とそれと結んだ買弁権力そのもたらす、圧制、抑圧、搾取、収奪、農民への搾取と無権利、これをただし、解放したい（だけ）だった。それは、名づけるなら（民族・民主）革命だった。また、（結果として）—世界でのキューバのおかれた位置から—社会主義革命だったと（解釈）する事はできる。だが、実践的に当時のキューバで社会主義を掲げること—最小限綱

いうが、党組織論の不在は、トロツキーの永続革命論と一体のものである。トロツキーは、レーニンを「代行主義」と批判したが、かれが軽視したのは、蓋然性を現実性に高める党の指導性である。「二つの戦術」は、「いわゆる市場問題について」にはじまり、「發展」で一応の完成をみるレーニンのロシア資本主義の現状分析をふまえて、その發展段階からする当面するロシア革命の課題、内容を論じたものである。ロシアの現状からすれば、民主共和制、農地解放、8時間労働制—後にポリシェヴィキの3本柱といわれたもの、党綱領の最小限部分—を中心内容とする民主主義革命でありしかし、その主体は、プロレタリアのヘゲモニーによる労働者農民の革命的民主独裁だとした。そしてまた、それは、ドイツを中心とする先進国の社会主義革命への突破口—当時とすればプロレタリア世界革命の一環—であるとした。このようなレーニンの論にたいしてトロツキストは、二段階革命的等の批判をするが、それが、愚論であることは、これまで何度も述べてきたし、また革命論史上の意味についても論じてきた。（ドイツ革命の敗北とローザ）「グラムシの政治理論とレーニン主義」—「情況」2007年3・4月、2008年7月号）

「發展」と「ふたつの戦術」はセットであるが、さらに「何をなすべきか」は、云うまでもなく党論であるが、当面するロシア革命からすれば二つの戦術のせめぎあいの中でプ

ロレタリアがその指導性、独自性を發揮して革命を推進していくための“何をなすべきか”である。そのような意味で「発展」、「二つの戦術」、「何をなすべきか」は、連関したセツトを構成している。

III

トロツキーは、永続革命論を複合的発展の法則「それは、相異なる発展段階の接合、別々の段階の結合、時代遅れの形態と、近代的な形態とのアマルガム」(「ロシア革命史」)から根拠づけた。つまり、遅れて資本主義の道を歩み始めた国では、封建制の残滓が(特に農業で)広範にあり、工業でも例えばロシアではクスターリの広範な存在がある一方で遅れているが故に先進国の最も進んだ技術を輸入した工業が存在する。そして、おくれた農奴的農民の圧倒的存在と数箇所の都市に集中した最新鋭の工場での少数のプロレタリアがその構造に応じて存在する。このような国家での変革を本質的に規定するのは、この進んだ資本主義の部分であり従ってそれは、プロレタリア革命以外ではないと。IIで述べた事との関連で言えば、プロレタリアのヘゲモニーの革命とすれば、このような根拠付けは一般論あるいは見透しとしては間違いいではない。更に付け加えるなら、複合的発展の重要な要素は、文化あるいは革命的インテリ

いたような資本主義の発展による二大階級への分化と階級闘争の進展という漸進的、実証主義的な道、干からびたコースではなく遅れた封建的要素と最新鋭の資本主義のアマルガムを一挙的に吹き飛ばす「資本論に反対する」主観主義ではない主意主義のみが必要なのだ。(加々美氏は、毛沢東思想の源流としてこの主意主義にふれ、陽明学の王船山「船山学を紹介している。興味ある指摘である。「裸の共和国」―情況新書)レーニンと言う「社会主義を建設するために、一定の文化水準が必要ならば、なぜ、この一定の水準の前提を、まず革命的方法で獲得することからはじめ他の国民に追いつくために前進してはいけないのか」(「わが革命について」)と。

このように考える時、主意主義ではあるが主観主義ではないためには、変革の対象たる当該の資本主義の認識「現状分析は、いかにあるべきか」という問題に発展する。テーマに即して云えば、トロツキーの永続革命論とレーニンの「二つの戦術」の経済(学)的基礎、前提ということである。あるいは、遅れた資本主義での知がいかんにしてそれをリアリティをもって認識するかと言つてもよい。トロツキーはレーニンの「発展」や「帝国主義論」のようなまとまった経済学の著書を残さなかつたが、客観的にはそれに論拠を与える経済学は、実は「宇野経済学」である。宇野の「経済政策論」は、(日本のおおくられて資本主義の道を歩み

ゲンチャである。グラムシ流に云えば知識人の要素である。イギリスが経済、フランスは政治で(大革命)で行ったことを(ブルジョア革命)、ドイツは、観念的に(カント、ヘーゲルに代表されるドイツ古典哲学)行った。レーニンは、三つの源泉といい、グラムシは(数学に例えるならある種の変換による―例えば波動方程式と行列力学の)同一性を云った。資本主義の特性はその世界性である。それは、勿論(世界)市場のそれでもあるが同時に知の世界性でもある。遅れた国の知識人は、最も進んだ知識(社会科学であれ自然科学であれ)を吸収しながら、しかし、足下の自国の遅れた惨状の中で苦吟する。自国のキャッチアップ「近代化」あるいは変革はいかにあるべきかと。カントやヘーゲルがフランス革命に小躍りし、マルクスもドイツの惨状の中でその変革の主体としてプロレタリアを(発見)したように、ロシアもゲルツエンや一連の文学やナロードニキの知の土壌の上にプレハーノフを皮切りとするマルクス主義は、生み出された。いくら国が悲惨であり民が貧しくてもこのような革命的インテリゲンチヤ、グラムシの云うところの「有機的知識人」を生み出すことなしには革命は成就しない。レーニンのいうとうり労働運動と社会主義の結合のみが成功の唯一の道である。そして、この知は、ジャコバンの「主意主義」である。何故なら、遅れた資本主義では、カウツキーに代表される第二インターが描

はじめた国では、有機的構成の高い資本が輸入され(あるいは)古いもの(封建的残滓を「かえって利用する事」)によつて資本主義の急速な発展がなされるとされる。また、帝国主義段階では、産業資本主義段階の資本主義の純化傾向が停滞し古いウクラードを温存する(逆転の傾向)がうまれるとする。このような認識は、複合的発展論と同一である。そして事実、宇野派の一人・渡辺寛は、そのような立場からレーニンを「レーニンの農業理論(御茶ノ水書房)で賢しらに批判している。第一次ブントが宇野経済学(トロツキー色(いろ)のレーニンと主体性哲学とともに三本柱として)に依拠したのは偶然ではない。トロツキー色(いろ)のレーニンとの同一の論理があり、特に、共産党の二段階戦略批判をこれに依拠して行った。(しかし、ブントは、正しく第四インターを批判したが、トロツキー理論そのものに對しては明確ではなかつた。)我々は、第一次ブントの継承者であると誇りを持っていう。だが、それは、その実践的魂に於いてであり、その理論の支柱とされた三本柱は、批判的に揚棄されねばならない。

宇野経済学にたいしては、かつて畏友、榎原均が、その価値論について原則的な批判を行っている。それを継承しつつ宇野派のいうところの段階論や現状分析あるいは、そこから導きだされる革命の戦略・戦術を総じて「日本型社民」という一つの潮流の批判として行うことが必要ではな

いだらうか？

レーニンの考えは、「いわゆる市場問題について」↓「発展」↓「農業綱領」(二つの道)、「何をなすべきか」、「二つの戦術」が、前期の代表的著作であり、経済、党組織論、政治、でありこれらは文字通り三位一体をなしている。「二つの戦術」は、メンシエヴィーキのブルジョア革命の左派としてのプロレタリアートに対してプロレタリアのヘゲモニー(労働独裁)を主張し、そのヘゲモニーを保障するものとしての党の目的意識性を云い(「何なす」、トロツキーとの違い)、このような革命の客観的根拠(蓋然性としての)を経済的著書で分析した。

それは、トロツキーの複合的發展(その前提たる不均等發展)の法則といった一般論ではない。複合的とは、経済的には、社会構成体(ウクラード)の複合を意味する。従って資本主義的生産様式を基軸とした構成体の構造と發展を分析しなければ、それは一個の抽象にすぎない。トロツキーの永続革命論の抽象性の原因である。(グラムシのプロシユタイン批判。グラムシのトロツキー批判は、アンビバレンツである、そこにグラムシを理解する鍵がある。)

レーニンの方法は、「資本論」の生産過程→小経営→問屋制→マニユファクチャー→機械制大工業→分析(それは、マルクスが、「要綱」での方法で述べているようにかならずしも歴史記述ではない(歴史を反映するかは時によりけり)

慢な批判等)だが、産業資本段階の純粋資本主義化への傾向から帝国主義段階での「逆転」を言うが、(宇野「経済政策論」それは、最近の發展途上国の資本主義の展開に照らしてみても普遍化しなにか法則化することは出来ない。(従って、伊藤誠氏は、昨今のグローバルな資本主義の展開に対して「再逆転」という奇妙な論理ひねり出して産業資本主義段階のいわゆる「純化傾向」へ逆戻りしていると言う。グローバルな略奪的な最近の新自由主義的資本主義の展開を云わんとしていることは理解するが、その事を純化や再逆転といった所で印象批判にすぎない。)だけではなくその段階論は「ドイツを積極的な、イギリスを消極的なモデルとする」(「経済政策論」)類型論でありそこから宇野学派のいう現状分析への橋渡しはない。強いて類型論から現状分析を行おうとするなら、彼等が批判するかつてのコミンテルンの類型と同一のものとならざるを得ない。

宇野の類型論の限界は、その内部から鈴木、岩田氏に代表される(世界資本主義)派という(分派)を生み出した。だが、この流れも、かつての1919年の綱領改定でのレーニンとブハーリンの論争を想起させる。即ち、ブハーリンは、資本主義の一般行程を述べる部分を新綱領から削除していきなり帝国主義の説明から入るべきと主張し、レーニンは、帝国主義はその以前の資本主義の結果としてその(上部構造)としてあるのだから削除すべきでないとした。

ある、それとしては論理である。)に依拠して、資本主義がどのように發展しつつあるのか、又、生産過程の發展に依じて市場がどう發展しているのか又、古いウクラードがどのような変容を受けているのかと言うロシア資本主義の構造と發展を明らかにするものである。これに対して渡辺寛は、農民層分解から資本主義の發展をいうのは間違いと批判(宇野派の代表的見解)する。しかし、レーニンが問題にし論じているのは、19世紀のすでに世界的に資本主義が展開している時代のことであって封建制から資本が生まれてくる時代のことではない。レーニンは、上記のように生産過程を基軸として資本の運動を解明し、そうする事で、全階級の姿と権力構造の基盤が明確になり、「二つの戦術」と言う政治革命論の根拠を明らかにした。ここにグラムシが云うところのトロツキーの一般的予見とレーニンの違いがある。渡辺のもうひとつのレーニン批判は、「段階論」がないという宇野派の教条によるものである。宇野派は、帝国主義段階の資本主義は、産業資本主義段階の(純粋化傾向)が(逆転)して古いウクラードを温存することによって發展するという。そのような視点からレーニンの農業理論は先の農民分解を含めて純粋化傾向を前提にしたものだというわけである。(レーニンが当時依拠したカウツキーの農業理論の批判、また、レーニンは「二つの道」の理論で段階論的視点への萌芽を見せたという手前味噌の傲

ここには、先に見た「發展」の生産過程から入る方法→帝国主義論では独占(ヒルファード)流にはコンビネーション)から(現在であれば、そのより進んだ形態としての多国籍企業)が一貫していることが読み取れる。いわゆる流通浸透視角としての世界資本主義論は、ブハーリンと同一の観点でありまた、バルブストロツキーの資本の世界性と民族国家の矛盾論あるいは、現在であれば、ウォーラーステインの世界システム論(これはマルクス主義ではないが、いわゆる従属論や日本でも例えば故森田桐郎氏等に多大な影響をあたえた。また、ネグリの「帝国」にもその痕跡を見る事が出来よう。)も共通のある種の流通主義あるいは歴史主義であり我々の取るべきものではない。それらは、説明のあるいは解釈の学である。我々は、マルクスのプランに沿った上向によって資本の運動法則を明らかにする方法を踏襲する。それは、レーニンの方法でもある。

(この小論は、最近、レーニン論をめぐる上島武氏に講師をお願いしたKCM=Kansai-communist-movementのシンポで発表したものである。)

2010・07・25